



A History of "Non-Silla-type" Horse Trappings Excavated in Japan:
a Comparison with Horse Trappings of the Dae-Gaya Federation

千賀 久

はじめに

①馬装具の系統の違い「新羅系」と「非新羅系」

②大加耶圏の馬具

③日本出土馬具との関わり

④日本にもたらされた「非新羅系」馬具



日本の古墳から出土する飾り馬用の馬装具は、その系統の違いによって「新羅系」と「非新羅系」とに大きく分けられるが、その主流となるのは後者の特徴をもつ馬具である。この分類基準は、朝鮮半島の5世紀後半以降の馬具の製作地の違いを示す要素として、金斗詰氏が提示したものであり、「新羅系」馬具は主に高句麗と新羅、そして加耶の一部の馬具に見られ、「非新羅系」馬具は主に百済と加耶に集中するという傾向があるので、日本の馬装具の系譜を知る際にも有効な分類といえる。

本論では、このうち「非新羅系」馬具を取り上げて、まず、日本出土のf字形鏡板付巻と剣菱形杏葉の故地の候補地である大加耶圏の馬装具の変遷のなかで、同地域で馬具の改造が頻繁に行われていたことに注目した。その多くは、「新羅系」・新羅製馬具から「非新羅系」への作り替えであり、その背景には百済地域からの強い影響が考えられ、特に高句麗との戦いで百済が一時的に滅ぼされた5世紀後半には、その難を逃れた工人を受け入れたことによる大加耶圏の工房の変容を想定した。また、剣菱形杏葉が考案された地域については、韓国での百済古墳の実年代観に議論の余地を残しているが、百済の公州地域でf字形鏡板と同時に創作された可能性のほうが強いと考えた。

そして、日本列島にもたらされたf字形鏡板・剣菱形杏葉の馬装具は、百済から直接きたものと、百済製品が大加耶圏を経由してきた場合、さらに大加耶圏でそれらが模倣されたものが運ばれた場合とが想定できる。また6世紀前半には、新羅の心葉形鏡板・杏葉の馬装具が大加耶圏で改造されたものが、日本の楕円形の飾り馬具に系譜的につながると考えた。

このように、5世紀後半から6世紀前半ごろまでの日本の馬装具の系譜は、まず百済に、その後は大加耶圏に求められた。これは、当時の朝鮮半島情勢のなかで、日本列島の倭と友好関係を維持していた地域を知るうえで有効な資料となる。